



里小路 — 武家屋敷跡



天正17(1589)年 それまで瀬高庄鷹尾(筑後柳川)に築いた鷹尾城に住んで、筑後一帯を治めていた田尻鑑種は、鍋島小城藩の家臣となり、つき従う者66名と共に山代の地に移り住むこととなりました。

田尻氏とその一族は、里一帯を開き、東西に本道を、南北に小路を設け、それぞれの住居を建てました。そして、本道の両側と南北小路の住居の境に、矢竹の小笹を植えて生垣を作り、大名屋敷の形を整えました。ここ里小路の生垣は、今もその一部が残されているもので、当時の

の大名屋敷の様子を偲ぶことができます。気をつけて見ると、青幡神社の参道などほかにも矢竹の生垣を見つけることができます。

曹洞宗 玉雲山 親種寺



親種寺は、田尻家の菩提寺(一家代々葬式や追善供養などをいとなむ寺)です。寺は、元亀元年(1570)田尻鑑種によって鷹尾城内に建立されたのがその開基(創立、始まり)とされ、天正17(1589)年鷹尾城内から現在の地に移されました。

本堂の裏山には、田尻家一族の墓碑や歴代和尚の無縫塔が建てられています。田尻家は、鍋島小城藩に仕えることとなり、山代東部に領地を与えられて、小城に上屋敷 大久保に下屋敷を構え、この地に住みました。寺の境内には、樹齢400年というカリンの大木があります。戦死した主君鑑種の遺髪とともに持ち

この大木は、佐賀県の銘木に指定され、豊臣秀吉出兵のとき、豊臣秀吉出兵のとき、戦死した主君鑑種の遺髪とともに持ち帰られたと伝えられています。

青幡神社と大楠



青幡神社は、松浦党の祖(一家の初代)源 久の長子源直が、久安年間(1145～1150鎌倉時代)、東山代里字館に政庁(政治の役所)を置いたとき、その鎮守(その土地を守る神、その神社)として創建したと伝えられています。

青幡神社を一の宮とし、二の宮として白幡神社を、また、祈願寺として宝積寺を建てたとされ、社紋には、今も、嵯峨源氏以来の三ツ星が用いられています。

境内中央には、県の天然記念物に指定されている根回り27.7m、樹高16mの楠の大木が、その樹勢を誇っています。

里館(政庁)：敷地3000㎡に水濠をめぐらした平館であったとされ、MR里駅から徒歩1分の所に水濠跡が残っています。

和田城：里館背後の岩として築かれた城で、上大久保バス停より徒歩1kmの地にその濠跡、石塁跡があります。